英語で他者とよりよいコミュニケーションを図る生徒を育む英語科の授業

～コミュニケーションの目的・場面・状況と他者を意識させることを通して～

Ⅰ　主題設定の理由

現在の日本では、外国籍をもつ人々が増加し、私たち日本人と関わりながら共に生活している。また、日本人が海外で学んだり、働いたりする機会も増えている。さらに、生成AIの急速な発展により、誰もが容易に情報の生成・翻訳・発信を行えるようになり、言語を用いたコミュニケーションの在り方や求められる力が大きく変化している。そして、グローバル化の進展や生成 AI の更なる発展に伴い、生徒たちが社会に出て活躍する2050年頃には、そういった状況が更に進んでいることが予想される[注1)]。加えて、「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会　論点整理」において、グローバル化が進展した社会の中で「国内外で異なる価値観をもった人々と協働による課題解決が求められる」[2)]と述べられている。それを踏まえ「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会外国語ワーキンググループ（第10回）」でも、外国語で他者とコミュニケーションを図る意欲をもったグローバル・多文化共生社会の担い手の育成の必要性が明記されている。これらのことから、母語や文化が異なる人々とコミュニケーションを図る必要が想定される。

現代において、英語は世界で広く使用されている。もはや英語母語話者だけの言語ではないことが以前から指摘されている。「文部科学省委託事業『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業』平成28年度報告書」には、「グローバル化が急速に進む中で、英語は、いわゆるネイティブ・スピーカーのみならず、世界の人々によってコミュニケーションのための国際共通語として用いられている現状があり、英語圏の人々のみならず、英語を母語としない多様な言語圏・文化圏の人々と意思疎通するための異文化コミュニケーションの能力の育成が求められている」[3)]と述べられている[注2)]。母語や文化が異なる者同士がコミュニケーションを図る際には、互いの価値観やその背景にある文化を理解してコミュニケーションを図ろうとする姿勢をもつこと、つまり、他者[注3)]に配慮する必要があると言える。さらに、生成 AI の発展により翻訳や英語表現の生成が容易になった現代においては、単に正確に伝える力にとどまらず、コミュニケーションの目的・場面・状況や他者に応じて適切に伝える力、すなわち他者を意識したコミュニケーション能力を育成することが必要であると考える。これらの必要性は現行の学習指導要領における「外国語コミュニケーションにおける見方・考え方」[注4)]にも述べられているが、川成美香は現行の学習指導要領において、「『目的や場面、状況』と最も関連のあるL2語用論に関する指導や評価は体系的には扱われていない」[7)]と批判し、語用論[注5)]を踏まえた指導が求められると指摘している。現行の学習指導要領でも語用論を踏まえた事項が扱われてはいるが、限定的である。言葉の使われ方や表す意味は、コミュニケーションの目的・場面・状況、とりわけ、他者によっても変わってくることから、授業における一つ一つの言語活動[注6)]においても語用論の考え方を踏まえて指導する必要がある。

本校英語科は、前研究シリーズにて「『生きた英語』でコミュニケーションを図る生徒を育む英語科の授業～形式・意味・機能とその結びつきを意識した表現の工夫を通して～」という研究主題を設定し、研究を進めてきた。その成果として、英語表現がもつ形式・意味・機能[注7)]の結びつきを理解し、機能を中心に英語表現を分類することで知識の精緻化を図ることができたことから、コミュニケーションの目的・場面・状況に応じて、英語表現を工夫して伝えることができた。課題として、コミュニケーショ

ンの目的・場面・状況に応じた英語表現を使うことはできていたが、翻訳をした英語表現をそのまま使ったために、英語表現が難解になってしまい、うまく発音できないといった他者への配慮が足りなかった生徒が見られた。これは、コミュニケーションを図る相手が誰か、相手がどのような人かといったことに対して考えを巡らすことが不十分であったことが原因であると考えた。

コミュニケーションの目的・場面・状況と他者に応じて英語で発信する力を高めていくためには、前述のとおり、語用論の考え方を取り入れることが大切であると考える。鈴木祐一は、「語用論的能力（pragmatic competence）とは、相手との関係性や状況（コンテクスト）を考慮しながら、メッセージを効果的に伝えるために必要な知識・スキルを指します」[10)]と説明し、「文化的な背景が異なる英語使用者同士が相互理解を図るために、どのような場面で、誰に伝えるかを考慮して、どのように伝えるかがより一層重要になります」[11)]と、語用論的能力を高めることの必要性を述べている。これを受け、本校英語科では、語用論的能力を「コミュニケーションの目的・場面・状況と他者に応じて英語で発信する力」と定義し、育みたい資質・能力として設定する。また、鈴木は「語用論の規範を実際に運用できるようにするためには、インプットとアウトプットの両方の活動が必要です。そして、文法習得と同様に、語用論習得においても明示的な指導が有効だということがメタ分析で示されています」[12)]と述べている。つまり、言語活動において、語用論の考え方を踏まえて、他者との関係性や状況に意識を向けさせるといった明示的な指導を行うことが必要である。その明示的な指導の中では、自らが使った英語表現がコミュニケーションの目的・場面・状況に応じたものになっているか、とりわけ、他者に応じたものになっているかをモデル[注8)]や教科書本文の英語表現、仲間や生成 AI 等によるフィードバックと比較させて振り返らせることが必要である。

以上のことから、英語科では、研究主題として「英語で他者とよりよいコミュニケーションを図る生徒を育む英語科の授業～コミュニケーションの目的・場面・状況と他者を意識させることを通して～」と設定し、研究に取り組むこととした。

Ⅱ　研究の概要

１　英語科で目指す生徒像

本校英語科では、目指す生徒像を以下のように設定し、研究に取り組むこととした。

英語で他者とよりよいコミュニケーションを図る生徒

「他者とよりよいコミュニケーションを図る」とは、他者の価値観やその背景にある文化に配慮し、事実や情報、自らの考えや気持ちを、伝えたり伝え合ったりすることを指す。

２　育みたい資質・能力

英語科における目指す生徒像に近づけるために、次の資質・能力を育みたいと考えている。

コミュニケーションの目的・場面・状況と他者に応じて英語で発信する力

「発信する」とは、「事実や情報、自らの考えや気持ちを、伝えたり伝え合ったりする」ことを指す[注9)]。そして、このような発信する力は、他者を意識して英語表現を選び、使用させ、振り返らせる経験を繰り返すことによって、コミュニケーションの目的・場面・状況や他者に応じたものへと高まっていくと考える。この資質・能力を育む過程において、複数の概念の関係性を日本語で整理させ、明文化させることで、生徒は自分の伝えたいことをどのように英語で表現すればよいかを理解することができるようになると考える。ここで、明文化させたものが、総論で言及されている「一般化され

た知識」となる。そして、「一般化された知識」を活用して、コミュニケーションの目的は変えずに、場面・状況、他者のいずれかを新たに設定した課題に取り組ませることで、生徒は自分の伝えたいことをコミュニケーションの目的・場面・状況と他者を意識しながら、英語表現を選択したり、より適切に言い換えたりすることが可能となる。これが総論で言及されている「新たな文脈の課題」に取り組ませることとし、「一般化された知識」を新たな文脈でも活用させるための場であるとともに、他者を意識して英語表現を選び、使用させ、振り返らせる経験を繰り返す場として位置づける。

以上のように、英語科における目指す生徒像に近づけるための資質・能力を育む過程で、概念や「一般化された知識」に基づいてコミュニケーションの目的・場面・状況を理解するといった概念的理解が促され、概念や「一般化された知識」に基づいてコミュニケーションの目的・場面・状況と他者に応じた適切な英語表現について思考させることで、概念的思考力が育まれると考える。

3　資質・能力を育むための手立て

本校英語科は、総論で言及されている「中核となる概念」、「一般化された知識」、概念、具体的知識については表１のように捉えており、〈他者への伝え方〉の視点で考えさせられるように設定している。実際の単元を例に、「中核となる概念」、「一般化された知識」、概念、具体的知識の関係を図にしたものを後掲資料１に示す。

中核となる概念	領域における具体的な言語活動
一般化された知識	複数の大切にさせたいことの関係性を明文化したもの
概念	具体的な言語活動を行う際に大切にさせたいこと
具体的知識	領域における具体的な言語活動で用いられる英語表現など

【表１　本校英語科における「中核となる概念」、「一般化された知識」、概念、具体的知識の捉え】

なお、「大切にさせたいこと」とは、領域における具体的な言語活動に取り組ませる際に、提示した課題を達成するために必要と考えられる言語の働きやコミュケーション上の工夫を指す。

その上で、資質・能力を育むために、次の二つの手立てを設定した。

(1) 具体的知識の習得・一般化を促すための単元構成の工夫

前述のとおり、「一般化された知識」は複数の大切にさせたいことの関係性を明文化したものとして設定する。そのために、単元の最初に単元の問いを与える。こうすることで、具体的知識の習得を促したり、一般化を促したりしていく。この場を Basic Section（以下 BS）とする。また、「一般化された知識」を新たな文脈でも活用させるための場を Advanced Section（以下 AS）とする。BS と AS の主な流れは以下のとおりである。

【 BS 】

①　学びの見通しを立てさせる

まず、単元課題（以下、Basic Task）の題材に関わる導入を行う。次に Basic Task を提示する。Basic Task は教科書等の内容に合わせてコミュニケーションの目的・場面・状況と他者を設定する。そして、〈他者への伝え方〉について単元の問いを提示する。その後、Basic Task に取り組ませるために、どんなことが伝えられそうか、それを既習の英語表現を使ってどのように伝えられそうか考えさせて共有させ、Basic Task への見通しをもたせる。

②　具体的知識から概念を見いださせる

まず、具体的知識を教科書本文の文脈やその具体的知識が自然に使われた文脈の中で生徒に気付かせる。その後、言語活動の中で使うことができるようにさせるために、教科書等を活用した多様なインプットを促す活動[注10)]を行う。そして、コミュニケーションの目的・場

面・状況と他者を設定した言語活動を行わせる。その際、必要に応じて[注11)]概念を見いだす問いを提示する。また、他者との関係性や状況に意識を向けさせるといった明示的な指導も行う。最後に、その授業を振り返り、習得した具体的知識から概念を見いださせるとともに、概念とそれに関わる具体的知識を学習プリント（後掲資料２）にまとめさせる。

③　一般化させる

初めにここまでの学習を振り返らせ、Basic Task に取り組ませる。その後、そのパフォーマンスを聞き直させたり、書き起こさせたりする[注12)]。そして、他者との関係性や状況に意識を向けられた英語表現になっていたかどうかを確認させるために明示的な指導を行う。加えて、Basic Task で使用した英語表現について振り返らせたり、BS 全体での学習を振り返らせ、単元の問いに関する具体的知識とその具体的知識をどのように使うとよいかについて共有させたりする。その中で、自分が伝えたいことを他者に応じて適切に伝えるためには、どの具体的知識を活用すればよいのかを考えさせたり、選ばせたりする。また、複数の概念の関係性も問い返し等を行うことで考えさせる。そして、共有された具体的知識や教師が作成した「一般化された知識」を効果的に活用したモデルと、聞き直させたり書き起こさせたりした英語表現と比べさせ、生徒自身の取組にいかせる英語表現を探させ、共有させる。共有させる際は、概念とどのように関わっているかを説明させる。最後に、BS 全体での学びを振り返らせ、学習した複数の概念の関係性を明文化させる。

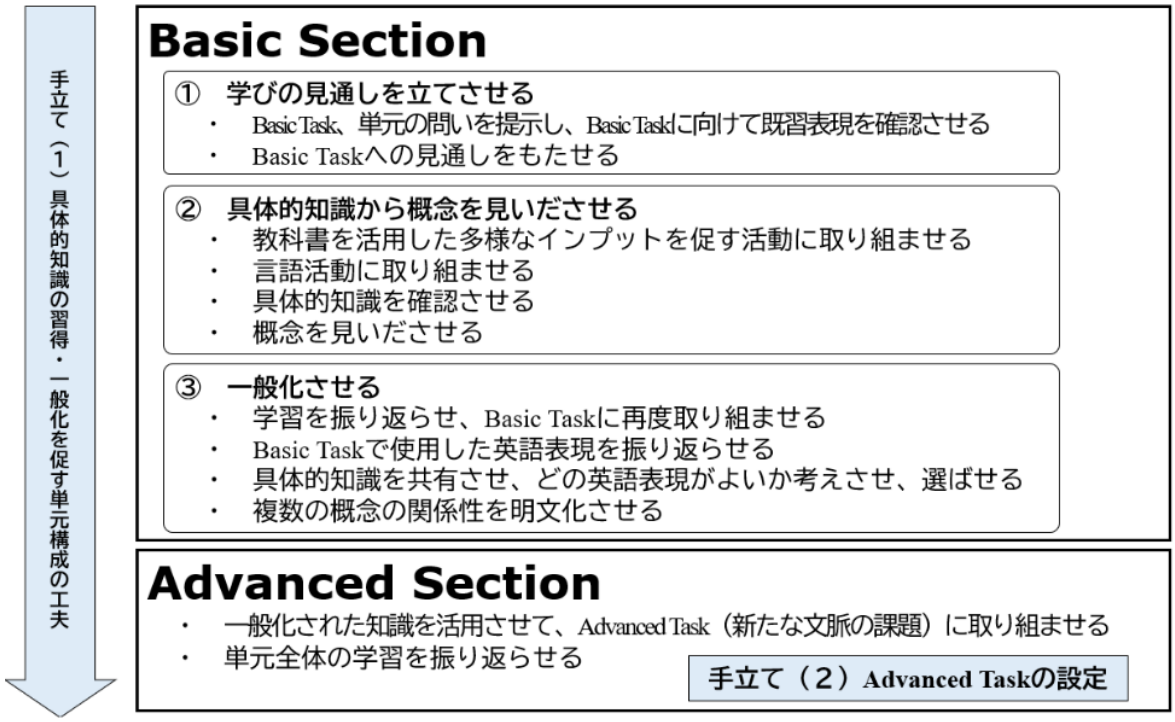
【　AS　】

「一般化された知識」を新たな文脈でも活用させるための場として、Advanced Task に取り組ませる。このことは、他者を意識して英語表現を選び、使用させ、振り返らせる経験を繰り返すことにもつながり、その過程で概念的思考が働くと考える。その後、単元全体の学習を振り返らせる。

(2) Advanced Task の設定

「新たな文脈の課題」として Advanced Task に取り組ませる。この Advanced Task はコミュニケーションの目的は変えずに、場面・状況、他者のいずれかを新たに設定する。「一般化された知識」を活用させ課題の解決をさせることで、単元で学習した知識を使わせる。なお、領域については Basic Task と同じ領域で設定する。

資質・能力を育むための手立てに沿った単元の展開をまとめると、次ページの図１のようになる。



【図１　資質・能力を育むための手立てに沿った単元構成図】

４　資質・能力が育まれたかの評価について

育みたい資質・能力が生徒にどの程度育まれたかについて、Advanced Task の活動の様子から見取ることで、手立ての有効性を検証する。また、学級全体の変容を捉えるための補助的資料として、抽出生徒を設定し、上記の分析方法に加え、Basic Task の活動の様子や学習プリントの記述からも見取りをすることで検証の一助とする。

５　研究の経緯

１年次では、英語科における目指す生徒像に近づけるための資質・能力を育むための手立てとして言語活動中の明示的な指導、一般化のさせ方の有効性を検証した。

言語活動中の明示的な指導については、言語活動の中でコミュニケーションの目的・場面・状況と他者を意識させる明示的な指導を重視して単元を構成した。単元を通して、生徒が自ら用いた英語表現がコミュニケーションの目的・場面・状況と他者に応じたものになっているかを振り返らせる活動を繰り返し設定した。その結果、意見共有の場面でなぜその英語表現を選んだのかを問い返した際、「相手が好きなものを話題にすることで、相手に興味をもってもらうため」「相手が知りたいと思っていることを話題にすることで、より詳しく相手に伝えたいことを伝えるため」のように、他者の情報を基にした意見をもつ姿が見られた。このことから、言語活動中の明示的な指導がコミュニケーションの目的・場面・状況と他者に応じた発信へ一定程度つながったと考える。

一方で、パフォーマンスの場面では、他者にとって分かりづらい英語表現を使用する姿が見られた。これは、自分の伝えたい内容があっても、それを英語で表現できないと感じたためであると考える。このことから、自分の伝えたい内容を相手が理解できるように、学習の中で身に付けた英語表現を用いてコミュニケーションの目的・場面・状況と他者に応じて発信する力をより高めていく必要がある。

一般化のさせ方については、単元の冒頭で単元の問いを提示し、Basic Task に取り組ませた後、そのパフォーマンスを聞き直したり書き起こしたりする活動を通して、他者や状況を意識した英語表現になっていたかを振り返らせた。また、モデルと自分の英語表現を比較させることで、より適切な英語表現を選択させるよう促した。その結果、多くの生徒が単元でねらいとする要素[注13)]を用いて一般

化させることができたことに加え、「一般化された知識」を活用してAdvanced Taskに取り組むことができた。このことから、一般化のさせ方の工夫は一定程度有効であったといえる。

一方で、一般化の場面で概念を言語化できなかった生徒が、Advanced Taskでは目的・場面・状況と他者に応じて適切な英語表現を用いていた事例も見られた。また、〈表現〉と〈表現の仕方〉注14)を分けて一般化させたことにより、両者の区別が分かりづらいと感じる生徒も見られた。具体的知識によっては両方に当てはまる場合もあり、「一般化された知識」の整理が生徒の思考をかえって複雑にしてしまう側面もあった。これらのことから、「中核となる概念」、「一般化された知識」、概念がどのようなものであるべきかを再検討していく必要がある。

６　２年次のねらい

１年次の成果と課題を基に、「中核となる概念」や「一般化された知識」、概念の捉えの見直しと、より効果的にコミュニケーションの目的・場面・状況と他者を意識させる明示的な指導の工夫を行い、資質・能力を育むための手立てを修正する。

研究１年次の成果と課題を踏まえ、コミュニケーションの目的・場面・状況と他者に応じて英語で発信する力を育むために、２年次のねらいを設定する。

まず、英語科としての「中核となる概念」や「一般化された知識」、概念の捉えを３ページの表１のように見直す。１年次の課題を踏まえ、学びの見通しを立てさせる際は、他者に応じることについて考えさせていくために〈他者への伝え方〉に絞って単元の問いを提示し、単元を通して〈他者への伝え方〉の視点で考えさせる。こうすることで、一般化の際の思考をさせやすくし、資質・能力を育むことにつながったか、Basic Task、Advanced Taskの活動の様子や学習プリントの記述から見取っていく。

次に、明示的な指導の工夫については、一般化を促す場面において、自分の伝えたいことを他者に応じて適切に伝えるために、用いる英語表現のよさや複数の概念の関係性について考えさせる。こうすることで、より効果的にコミュニケーションの目的・場面・状況と他者を意識させ、資質・能力を育むことにつながったか、学習プリントの記述やAdvanced Taskの活動の様子から見取っていく。

注１）　現行の学習指導要領解説外国語編にも「グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように、一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている」[1)]と述べられている。今後、社会生活のみならず、日常生活の中でも英語が必要とされる場面が増えてくることが予想されることから、外国語によるコミュニケーション能力が必要とされ、そのような場面ではコミュニケーションを図る相手に応じてよりよいコミュニケーションを図る必要があると考える。「よりよいコミュニケーションを図る」には、話し方やアイコンタクトのような非言語の要素も含まれるが、本研究では、研究対象とはしない。

注２）　他にも、柴田美紀・仲潔・藤原康弘は「母語や文化が異なる人びとが共通言語として英語を用いる場面では、母語話者同士によるコミュニケーションに比べて、誤解やミスコミュニケーションの頻度が増えると予測できます。これは言語使用の事象の捉え方、価値観と深い関わりを持つからです」[4)]と述べたり、木村大輔は「言語的バックグラウンドの異なる人同士がやり取りする際には、既存の知識を使うだけではなく、相手と柔軟に協働することが必要」[5)]とも述べたりしている。

注３）　「他者」とは、コミュニケーションを図る相手、課題における伝える対象を指し、アナウンスなどの音声を発した人、テクストなどを書いた人、スピーチにおける聴衆といった複数人の場合もある。

注４）　学習指導要領解説外国語編には「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」について、「『外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること』であると考えられる。外国語やその背景にある文

化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉えるとは、外国語で他者とコミュニケーションを行うには、社会や世界との関わりの中で事象を捉えたり、外国語やその背景にある文化を理解するなどして相手に十分配慮したりすることが重要であることを示している。また、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築することとは、多様な人々との対話の中で、目的や場面、状況に応じて、既習のものを含めて習得した概念(知識)を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、課題を見いだして解決策を考えたり、身に付けた思考力を発揮させたりすることであり、『外国語で表現し伝え合う』ためには、適切な言語材料を活用し、思考・判断して情報を整理するとともに、自分の考えなどを形成、再構築することが重要であること」[6)]とそれぞれ説明されている。

注５） 鈴木渉は語用論について、「話者を取り巻く環境下で言葉がどのような意味をなすのかを考えていく学問分野である。言葉と意味は必ずしも一対一の対応だけではなく、コミュニケーションの場面によっては複数の意味を持つことさえある」[8)]と述べている。「コミュニケーションの場面によっては」とあるが、本校英語科では「コミュニケーションの目的・場面・状況と他者によっては」と同義と考えている。

注６） 学習指導要領解説外国語編においては、言語活動は、「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う」[9)]活動と定義されており、本校英語科もこの定義に則る。

注７） 本校英語科では、形式をある語句やフレーズの発音、語彙、文法、綴りなどといった形式的な要素、意味はある語句やフレーズが日本語でどのような意味を伝えているのかという内容的な要素、機能はある語句やフレーズをどのような時に使用するのか、使用したときにどのような働きがあるかという要素であると定義する。

注８） 本校英語科では、「一般化された知識」を効果的に活用した例となるように教師が作成したものをモデルとして生徒へ示している。

注９） 「発信する」ことは「話すこと」と「書くこと」の二つの技能を指す。さらに、聞いたことや読んだことを踏まえて話したり書いたりするというような、統合的な活動も含む。

注 10） 多様なインプットを促す活動として、本校英語科では教科書本文の音読やリテリング等に加え、Small Talk 等の帯活動を学年や生徒の実態に応じて行う。これらの活動を通して、その後のアウトプット活動につながる具体的知識を習得させる。

注 11） 事前に教師が想定していた概念以外のものが生徒から見いだされる可能性がある場合は、概念を見いだす問いを提示する。英語科としては、想定していた概念以外のものが生徒から見いだされることについて否定的な立場ではないが、３年間の系統性をもたせて概念について考えさせていくためにも、概念を見いだす問いは必要であると考えている。

注 12） 松浦伸和は英語科の授業における思考力を育むための指導として「思考力育成のためには、対比・順序・関連・類推などを伴う活動をさせることが必要である」[13)]述べていることから、本校英語科ではこのような手立てが必要であると考えている。

注 13） 研究１年次においては、概念を「単元でねらいとする要素」という言葉を用いて生徒に提示していた。

注 14） 研究１年次においては、一般化させる際に知識の構造とプロセスの構造の両輪で考えさせており、知識の構造を〈表現〉、プロセスの構造を〈表現の仕方〉という視点を与えて生徒に提示していた。

引用文献

１） 文部科学省『中学校学習指導要領解説外国語編』開隆堂、2018 年、５ページ

２） 文部科学省『今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会　論点整理』2024 年、３ページ

３） 東京学芸大学『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成 28 年度報告書』2016 年、109 ページ

４） 柴田美紀・仲潔・藤原康弘『英語教育のための国際英語論』大修館書店、2020 年、39 ページ

５） ワールドファミリーバイリンガルサイエンス研究所、2021 年、『リンガフランカを意識した英語教育を～東京工業大学　木村准教授インタビュー～」、https://bilingualscience.com/、(2025 年６月 22 日参照)

６） 文部科学省『中学校学習指導要領解説外国語編』開隆堂、2018 年、10～11 ページ

７） 川成美香『日本人英語学習者の第２言語(L2)語用論能力の育成に向けて―「異文化コミュニケーション能力」参照枠策定の試

み―』明海大学外国語学部論集　第 37 集、2025 年、38 ページ

８）　鈴木渉『実践例で学ぶ第二言語習得研究に基づく英語指導』大修館書店、2017 年、141 ページ

９）　文部科学省『中学校学習指導要領解説外国語編』開隆堂、2018 年、85 ページ

10）　鈴木祐一『新しい第二言語習得論　英語指導の思い込みを変える』研究社、2024 年、45 ページ

11）　10）に同じ

12）　鈴木祐一『新しい第二言語習得論　英語指導の思い込みを変える』研究社、2024 年、60 ページ

13）　松浦伸和『英語科における「思考・判断・表現」の評価に関する研究』日本教材文化研究財団、2014 年、11 ページ

参考文献

和泉伸一『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』大修館書店、2009 年

和泉伸一『フォーカス・オン・フォームと CLIL の英語授業　生徒の主体性を伸ばす授業の提案』アルク、2016 年

和泉伸一『第２言語習得と母語習得から「言葉の学び」を考える』アルク、2016 年

石原紀子『多文化理解の語学教育　語用論的指導への招待』研究社、2015 年

後掲資料１（生徒には配付しない。指導者が単元を構成するときに作成するもの）

単元：　２年生　Unit 2　What is local food?

■　単元目標　■

相手に自分の知っているものをすすめるために、そのものについて、理由や考えなどとともに紹介することができる。【関連　CAN-DO リスト：　話すこと[発表]２年前半】

■　Basic Task（単元課題）　■

他県から遊びに来る友達が、愛知県のローカルフードについて知りたがっています。相手にすすめるために、愛知県のローカルフードについて理由や考えを交えて紹介しましょう。

[形式：発表（１分 30 秒程度）]

■　単元の問い　■

【他者への伝え方】

例１）　相手に自分の知っているものをすすめる時のよい紹介の仕方とは？

例２）　相手に自分の知っているものをすすめる時に大切にするべきことは？

■　中核となる概念と一般化された知識と概念と具体的知識（英語表現）の関係　■

中核となる概念

領域における具体的な言語活動　：　おすすめ紹介

一般化された知識

複数の大切にさせたいことの関係性を明文化したもの

【他者への伝え方】

相手に自分の知っているものをすすめる時には、相手に興味をもたせながら、自分の考えを明確に伝え、その理由や具体的な事実を関連させて伝える。

概念　具体的な言語活動を行う際に大切にさせたいこと			
自分の考えを伝える	理由を伝える	具体的な事実を伝える	相手に興味をもたせる
具体的知識　領域における具体的な言語活動で用いられる英語表現			
・I like ~. ・I think ~. ・I want to ~. など	・Because ~. ・So, ~ など	・When I ~, …. ・If you ~, …. ・We can ~. など	・Do you like ~? ・If you ~, …. など

※　具体的知識の意味・機能は省略

後掲資料２

単元：　Unit 2　What is local food?　　Class 2-　　No.　　Name

Unit Concept Note

■　Basic Task（単元課題）　■

他県から遊びに来る友達が、愛知県のローカルフードについて知りたがっています。相手にすすめるために、愛知県のローカルフードについて理由や考えを交えて紹介しましょう。　［形式：発表（１分 30 秒程度］

■　単元の問い　■

【他者への伝え方】　相手に自分の知っているものをすすめる時のよい紹介の仕方とは？（に大切にするべきことは？）

■　Unit Concept Note　■

日付	概念（大切にしたいこと）	具体的に使えそうな英語表現
5/10 5/13	事実を伝える	・When I go to a ramen restaurant, I order tonkotsu ramen. ・If you go there this week, you can eat a special ramen.
5/15	理由を伝える	・I like Sapporo ramen because the soup is thick.
5/20	自分の考えを伝える	・I think misonikomi udon is the best of all Nagoya meshi.
5/21	相手に興味をもたせる	・Do you like ~?　・You like ~, right?　You can~.

■　一般化された知識（学習を通して考えた、単元の問いに対する答え）　■

相手に自分の知っているものをすすめる時には、（相手に興味をもたせながら、自分の考えを明確に伝え、その理由や具体的な事実を関連させて伝える。）